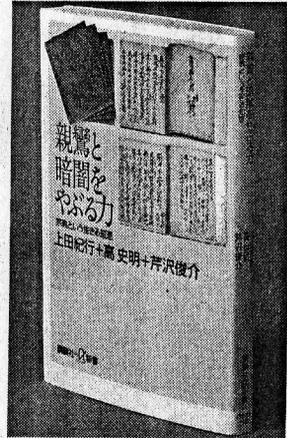


# 「親鸞と暗闇をやぶる力」

上田紀行・高史明・芹沢俊介著



「人生は闇」とか、「人の心の奥には闇がある」とか、昨今よく言われるが、それではその「闇」とは何かと問われたとき、果たしてこれまでどれくらい的確に答えてきたのか。この書は文化人類学者(上田)、作家(高)、社会評論家(芹沢)の三人が各人「闇」に切り込み、「闇」の本質を見きわめようと、鼎談という形をとりながら模索している。

「闇」を高度経済成長の豊かさの影に隠れた、飽食ゆえの「生きる意欲の低下」ととる上田に対し、高は、ドストエフスキーや夏目漱石の作品上の言葉为例にとり、知識偏重の文明のみを「善」とした結果、究極は大量殺戮兵器へと向かう人間が根源的にもった矛盾、つまり「知恵の闇」ととる。ところが芹沢だけはただの悲観論で終わらない。明治以来、日本人が「世間」の中でしか自我形成されなかったことに触れ、現在その「世間」が急速に崩れ、自由気ままになったと述べる。しかし

## 闇の本質を模索する鼎談

今、新たな「価値観」や「制約」がないことによる孤独感や苛立ちがやってきていると言っただ。その意味であくまで次の世界が創られるまでの過渡期とする点で一線を画す。

その違いは、「闇」への向かい方にもあらわれる。上田は「生きる意欲を向上」させるため、はみだしてもいいから「やむにやまれぬ契機や行動」を大事にすべきだと言う。高は人知の壁をのりこえるため、親鸞の残した宗教が提示する知恵の力とその応用を持ち出す。だが芹沢は、ある程度、自由に生きられるようになったことを評価しつつ、行きづまったときの「戸惑い」から脱するときの逃げ道を大人や社会が用意しておくべきだとする。

親鸞に関しては高が中心となって述べてはいるが、三者微妙に「闇」のどらえ方が違い、メインタイトルに親鸞の名がない方が、むしろ、この本の狙いは伝わったようにも思える。つまりところ、抱いている闇は個々人で異なり、それを見つめることからしか闇を超えられることはできないことをこの三者のズレが浮かび上がらせているようだ。読後、闇が闇を呼び、一層深まったような気になってきた。

評・宮本誠一(小規模作業所「夢屋」代表)

講談社＋α新書・800円

◇うえだ・のりゆき 1958年東京生まれ。年山口県生まれ。 ◇こ・さみよん 32 42年東京生まれ。 ◇せりざわ・しゅんすけ